

《柳家 花緑》氏

「『いのち』を最大限に使い切る生き方～使う『いのち』が我々の使命～」

本日のタイトルについて

本日の講演のタイトルにある「使命」は、ある本に書かれていたことに由来します。二人の登場人物がいて、神様が乗り移ったイタコにもう一人がインタビューするという設定で、掛け合いのタッチが非常によく、思わず落語の小話にしたいと、許可まで取りに行った会話です。その最後の部分で人間の「使命」について語り掛けるのです。「人間は目標をもって生まれてくる。大望もあれば、美味しいもの食べたいという目標もある」「ええっ、それだけでもいいんですかあ」「いいんだ。人間はいろいろなタイミングで亡くなるもので、何かを成し遂げなきゃいけないと思っているけど、そうじゃない。途中でいいんだ」「ええっ、どうしてですか」「人間は命を使い切るのが使命だからだ」と。

また人間は何を楽しみに生まれてくるのかという問いに対しては、「あの世とは食べたいものは何でも出てきて何でも叶う場所で、やがて飽きてしまう。だから、悩みたい、迷いたい、苦しみたいとなり、その3つを体験したくて現世で我々は人間をやっているのだ」と、語ります。

この話に私は非常に共感しました。そして、皆さんにも是非お話ししたいと思い、本日のタイトルに選んだわけです。

発達障害という病

私は5、6年前に初めて自分が発達障害、学習障害だと知りました。小学校から中学卒業まで主要科目の成績はかなり酷く、高校に進学する学力はありませんでした。漢字も読めないので授業そのものにも興味がなくなり、喋ってばかりいました。多弁症です。中学に入っても全く落ち着く気配はありませんでした。

この多弁症というのは脳の病気で、軽減されることはあっても治りません。一生涯つき合っていかなければならないわけです。

皆が出来ることが自分に出来ないのは結構な傷になり、人として無価値感を感じながら、自分の土台が作れない状態に、全く自信が持てない、そういう状態でした。

ただ、落語家の家庭に生まれ育ち、祖父である5代目柳家小さんの活躍を見ながら9歳の時に落語を始めました。そんな成績でありながら、落語のお陰でいじめにも遭わず、ひきこもりにもならず、やっつけられました。

ものの見方を変えると人生が変わる

人生の「悩みたい、迷いたい、苦しみたい」の一例として、私の発達障害のお話をしましたが、そんなものを自ら欲するなんて嫌だ、となった場合、モノの見方を変えるとそのつらさを緩和させることが出来ます。「幸も不幸もない。そう思う心があるだけ」という話をしますが、我々は、これはいけないこと、これはいいことと最初から決めつけているところがあります。もちろん明らかにやって悪いこともあります。日本ではダメなことが、住む国が違えば許されることもあるなど、立つ位置によって価値観が変わるわけです。皆さん、良い悪いは何によって決めるのでしょうか。「幸も不幸もない。そう思う心があるだけ」とは、なかなか得難い価値観だと思いました。共通認識として幸も不幸も決まっていると思っていましたが、宇宙ではそんなことは言っ

ていません。だから自分の判断が大事であるということなのです。

私は「ポジティブに生きる」というのは好きな言葉ですが、「ポジティブ・シンキング」とは異なります。ネガティブなことをポジティブに見よう、つらいのに笑おう、それが「ポジティブ・シンキング」です。私が言いたいのは、ネガティブなのをポジティブに見ようという前提に、ネガティブなものを作り、そういうレッテルを貼っていることが危険だ、ということです。自分の都合の悪いものは全部ネガティブなものとは、まさに自分がネガティブなものを作り出しているわけで、それに気づこう、そして自分の判断を大事にしよう、ということがまず言いたいわけです。

次に「悩み、迷い、苦しみ」を緩和するものとして、「掃除」「笑い」「感謝」について紹介します。

「掃除」には、物理的に周囲をきれいにすること以外に、自分をきれいにすることもあります。そうするとパワーがあがるそうです。

また、「笑い」は、免疫力が上がり血糖値が下がって、がんの予防にもなるといわれています。1 回馬鹿笑いをすると数千個のがん細胞が死滅してしまうという有難い効果があり、笑うと体が温まります。体は温かい方がいいに決まっています。

最後に「感謝」です。まずはその反対語が何かということですが、私は「頑張る」だと思っています。「頑張る」とは、無いものをみているのです。例えば、オリンピックでメダルを目指し、既に取った人は金メダルを目指すというように、無いものを追いかけているのです。現状に満足するな、ということです。一方で、「感謝」とはあるものをみて、あることに感謝するのであり、全く性質が異なるわけです。「幸も不幸もない。そう思う心があるだけ」とは、様々なことに感謝ができるということでもあるのです。「頑張る」に付随する言葉として「努力」があります。「努」の一部に「奴」がありますが、これは「人に強いられる」という意味があるそうです。頑張って朝までゲームをします、頑張ってお酒を飲みます、というのは普通ありえず、喜んで楽しんでやるものです。頑張るのは一人、一馬力だけど、感謝は何人にでも伝えられると考えれば、感謝は伝えた数だけ力が生まれます。

自分がこの演台に立ち、皆さまとお会いできるのも、感謝すべき人がたくさんいるから実現できたものだと思います。また、多弁は商売にも役にたっており、この障害だったことにも感謝しています。

このように、モノの見方というもので人生ががらっと変わります。「悩みたい、迷いたい、苦しみたい」を緩和する魔法のようなものだと私は思っています。

人に喜んでもらうために

「いのち」というものを考えたときに、どう使うかは自分自身に任されています。この「いのち」は誰かに指示されるものではないけれど、やはり良い使い方には共通するものがあるわけです。人は、自分がやったことで周りが喜んでいて、人に喜ばれると嬉しいという気持ちがあると思います。例えば、私が講演をして皆さんが喜んでいただいたらとても嬉しいわけで、これは教わるものではありません。どこの国の、どんな小さな子供でも、自分がやったことで周りが喜んでくれると嬉しいわけで、どうもそういうことが DNA に入っているのではないかと、ということなんです。人は人に喜ばれるということが最大に嬉しいことであり、つまり自分の夢を叶えたいければ、まず人の夢を叶えましょうということになります。人のために尽くしてあげると周りが今度はこっちを向いてくれる。じゃあ、今度はあなたの番ね、あなたの夢をかなえましょうと。損得勘定があってもいいのです。その人のために動いてあげたことは事実であり、実行したことが大事なのだと私は思います。